

天声人語

海軍少将から小
児科医に転身して
九十三歳で亡く
なつた吉見信一さ
んの葬儀が、おと
とい東京で行われ

た▼マーシャル群島のウオツ
ゼ島守備隊司令官に吉見さん
が着任したのは一九四三年夏
のことだ。太平洋の制海、制
空権は次々とアメリカに奪わ
れ、約三千五百の将兵と民間
人が立てこもる小島は補給路
を絶たれて孤立した▼飢餓と
の戦いが始まる。野ねずみを
潰してヤシ油でいためたもの
が最高のごちそうだった。毎
日、何十人も兵士が栄養失
調で倒れていった。発狂して
自殺する部下もいた。終戦の
ときに生き残っていたのはわ
ずか千人余りだった▼復員し
てみた祖国は、元提督の目に
弱肉強食と下克上（げこく
じょう）の世界と映った。み
る夢は決まって、なすすべも
なく餓死させた部下たちの姿
である。どう生きれば、彼ら
の霊を弔えるのだろう。そし
て、虚脱した自分自身の心を、
もう一度奮い立たせることが
できるのだろうか。そんな思い
が畑違いの医の道選ばせる。
五十歳、知命の年だった▼学
徒動員から戻って東大受験を
目指す長男と、机を並べての
猛勉強が続いた。あくる年、慶
応大学の医学部に合格した。
ふかしいもや黒パンをカバン
に入れて大学に通った。学生
服は軍服の襟章をはがして間
に合わせた▼卒業後、横浜の
自宅に小さな内科小児科医院
を開いた。子供の急患と聞け
ば、真夜中でもかけつけた。診
察室にひとりでいると、海の
ざわめきが耳によみがえるよ
うになった。一度捨てたはず
の海が、たまらなく恋しく思
えるのだ。船会社にかけあつ
て船医として何度も外洋航海
に出た。それはひそかな鎮魂
の旅でもあつたのだろう▼開
業して間もないころ、吉見さ
んはある雑誌に請われて転身
のいきさつを書いた。その最
後を「三等医者だった私の人
生は、思えばそのものが三等
人生だった」と結んでいる。そ
のことはをいま、「一等人生」
と言い換えてあげたい。